

体拘曲也」と説明する。

29 ○争 ……我先に争うように

○刻鏤……鑄る。彫り付ける。刻む。木に彫り付けるのを「刻」、金に彫り付けるのを「鏤」という。彫刻。鏤刻。『礼記』『少儀』に「食器不刻鏤」の一文が、また『礼記』『哀公問』に「車不雕幾、器不刻鏤」。『荀子』『富国』に「雕琢刻鏤」の一文が、『史記』『礼書』に「刻鏤文章」の一文が見える。

30 ○精魄……魂、また体。精魂。『抱朴子』『内篇』に「抱朴子曰、人無賢愚、皆知身之有魂魄、魂魄分去即病、尽去即死。」とある。古代中国では魂魄が身中にあるときに「生きている状態」で、これらが身から完全に離脱すると、「死」の状態になると、考えられていた。

また魂と魄については、ともに人のたましいを表すが、生前においては、人の精神をつかさどるのが「魂」、人の肉体や形質をつかさどるのが「魄」とされた。『中論』『論夭寿』に「夫形態者、人之精魄也」の一文が、また郭璞『江賦』に「挺異人乎精魄。」の句が見える。

○幾 ……この「幾」の一字については、諸氏により訓と語釈が分かれる。「いくばくか」という訓もあるが、道真は道中大変悲惨な境遇にあったから、「いくばくか」という程度の精神的消耗では無かったはずである。したがってここでは「幾下」と訓じる読みを採る。

○磨研……磨きとぐ。摩研。研磨。

韓愈の「送靈師詩」に「才調眞可惜、朱丹在磨研」の句が見える。

31 ○信宿……二泊、再泊。

『詩経』『豳風、九罭』に「公婦不復、於女信宿」の句が、また『春秋左氏傳』『莊、三』に「凡師、